

## 「東日本大震災 災害活動報告」

宮城県女川町消防団 団長 鈴木 正文



### ○管内被害状況

平成23年3月11日（金）午後2時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0という巨大地震が発生、本町においては震度6弱（推定）を観測し、太平洋沿岸に大津波警報が発令されました。

これまでも数多くの地震・津波を体験している町民も長時間にわたる激しい横揺れや縦揺れを感じ、誰ももが今後起こりうる大津波の来襲を頭に描きながら避難準備をしていたのではないのでしょうか。

当時、私は、家業の関係で海上で作業を行っていましたが地震発生直後、海面の変化に気づきながらも役場（災害対策本部）へ向かうため直ちに寄港、午後3時頃に役場に到着し、その30分後、水平線に太い白線が見えた数分後には、昭和35年チリ津波直後に設置された津波防波堤（約6m）を越える津波が本町を襲い、陸上部に到達した津波は、押し波と引き潮が衝突し、水位

は上昇の一途をたどり沿岸部に接する地区すべてを飲み込み壊滅的な被害を受けることとなりました。

この大地震と津波により数多くの生命と財産が奪われた本町の被害状況は、死者491名、行方不明者336名（平成24年3月6日現在）、一般家屋は、4,413棟中2,923棟が全壊・流失という甚大な被害をもたらし、小さい町ながら全国有数の水揚量・金額を誇る魚市場や各地区の漁港、養殖施設も一瞬のうちに失い、その姿は、数棟の鉄筋建物を残し、「海と緑と魚のまち女川」は、戦後の廃墟化した町並みと同じ景色に見えました。

消防団においても団員233名中（当時）殉職者7名、消防ポンプ積載車15台、資機材格納庫等23棟が流失損壊いたしました。又家屋が全壊流失した団員については、7割弱にあたる162名に達しました。



震災直後  
JR女川駅裏 流された列車が山の上へ



津波直後  
役場屋上から庁舎へ船が激突



津波到来直前  
湾内の海水がすべてなくなった 魚市場の基礎が露出

### ○活動内容

消防団員は、震度4以上の地震が発生した場合の初動体制を定めており、各家族の安全を確認したうえで詰所に参集、その後、各種被害状況を調査し、報告することとなっておりますが今回の災害では、半島部の分団は、幹線道路が寸断、通信機器も使用できない孤立した状況下で住民の避難誘導や水門・陸こうの閉鎖業務に従事、翌日からは、各地区の被災状況報告と活動の指示を受けるため徒歩で長時間を要しながら災害対策本部へ通うことになりました。

その後、続々と緊急消防援助隊、自衛隊、警察などの救援部隊が到着し、合同で捜索活動等を開始しましたが当初、重複した箇所を捜索するなど連携がうまくいかず情報共有化を図るため毎朝、ミーティングを実

施、その他、防災計画にも記述のない遺体の取り扱いについては、消防団員と町職員により公用トラックと消防ポンプ積載車を使用し、フル回転で安置所まで搬送いたしました。長期間にわたる過酷な任務でしたので現在は、従事した団員を対象に「震災ストレスセミナー」を町と共同で開催し、団員の心のケアについて、短期的ではなく、継続的なケアに努めていきたいと考えております。

### ○団長からのメッセージ

残念ながら今回の震災で本町を含めて多くの消防団員の尊い生命が奪われました。このような悲劇が再び起こらないよう消防防災体制のあり方については、現在、消防庁の検討会で検討されているようですが、一方で震災活動を通じて、改めて地域・住民にとって消防団がいかに重要な存在であるかが再認識された震災だと感じました。これら難題を解決し、次世代の団員に引き継げるよう努力してまいります。

震災直後から(財)日本消防協会をはじめ、全国の消防関係団体などから温かいご支援を頂戴いたしましたことについて深く感謝を申し上げ、活動報告といたします。



震災後  
26施設中22施設が全壊 資機材格納庫



震災後  
山の中で発見 消防ポンプ車